津久井町の昆虫Ⅲ

守屋博文[*1]・有井一雄[*2]・高橋耕司[*3]・山村聖[*4]

1　はじめに

現在の相模原市は、2006（平成 18）年に津久井郡津久井町と相模湖町の 2 町、その翌年には津久井郡城山町と藤野町が合併し、新しい相模原市として新たな歴史に踏み出すこととなった。そして次の大きな一歩として、2010（平成 22）年 4 月には全国で 19 番目の政令指定都市に移行し、南区・中央区・緑区という区制が敷かれ、旧津久井町（以下津久井町として表記）は緑区の一部となった（図 1）。

今回発行した津久井町の昆虫は、過去に 2 冊が発行されており、津久井郡津久井町時代の 2004（平成 16）年に『津久井町の昆虫Ⅰ』が、合併後の相模原市津久井町として 2008（平成 20）年に『津久井町の昆虫Ⅱ』がそれぞれ発行されている。そして政令指定都市移行後の 2012（平成 24）年に津久井町史昆虫分野基礎調査の総まとめとして『津久井町の昆虫Ⅲ』を発行することができた。

今考えれば、時代の流れの中で調査された成果が、それぞれの節目にこのような形で記録され、印刷物として発行できたことは重要なことであったと思われる。津久井の名は消え緑区としてスタートした津久井町であるが、本報告は津久井郡津久井町及び相模原市津久井町としての時期を含めた、節目となった 2010（平成 22）年 3 月までに整理された資料を中心に、その後新たに解明された事実を加え記載した昆虫類の目録である。

図 1　旧津久井町位置図

2　津久井町の昆虫相

津久井町はそのほとんどが山地で、津久井湖以東の相模川流域は沖積平野となっている。津久井町は相模原市の西側の南部に位置し、丹沢山や蛭ヶ岳、大室山などの丹沢山地稜線部が南側に位置

し、北側は道志川が流れている。丹沢大山国定公園は旧町域内の約半分を占め、緑地が多く残っている。

津久井町の昆虫相を概観し、あえて区分すると大きく次の５つに分けることができる。丹沢山地稜線部、背後に広がる緑地帯、宅地が隣接する林や低山地、河川周辺の河原を含めた場所、そして住宅密集地である。昆虫類の生息に不可欠なものとしては酸素や水、土壌や植物、微小動物などがあり、条件としては気温や湿度、水温、標高、周辺状態などさまざまな要素があげられる。これらが数えきれないほど組み合わさり、それぞれ各昆虫が生息する環境となっている。言い換えると多様な環境には多様な昆虫類が生息するということとなる。これが前記した大きな区分となるのであるが、当然その間に壁があるわけではなく、相互に影響しあって複雑な関係を保っているのが現実である。

多様という表現は、近年になって種の多様性の必要性が叫ばれている中、よく使われる言葉である。好意的に受け止められる場合がほとんどであるが、使い方によっては裏付けのない使い勝手の良い表現方法である。前述した「多様な環境には多様な昆虫類が生息する」という表現もまさしくこのことかもしれない。しかし、今回の報告書では、津久井町の現在の状況においてどのような種類の昆虫類が生息しているのか、また過去にはどのような昆虫類が生息していたのかを述べ、その多様である環境下での昆虫相を具体的に示すことができた。

目ごとに各執筆者により確認種の特徴や地域性、環境との関係などが細かく述べられている。ここで記述することは内容が重複してしまうこともあり、また平成 25 年に刊行が予定されている津久井町史自然編での執筆内容にも触れかねないので、詳細についてはそちらに譲ることとするが、しいて挙げるのであれば、先に挙げた５つの区分に対応した昆虫相が検証されたことになる。丹沢稜線部ではミヤマハンミョウやミヤマサナエ、クチキウマといった種類が、その背後に広がる高地の緑地帯からは、ミヤマノギカワゲラやニシタンザワメクラチビゴミムシ、ヒメオオクワガタ、キタササキリモドキ、ムラサキトビケラなどが確認されている。さらに低山帯や宅地が隣接する林などからは、ガガンボカゲロウやムカシトンボ、ヨツメトビケラ、シロスジカミキリ、ルリボシカミキリ、トゲアリなどが、河川周辺の緑地や河原からはカワラゴミムシやマグソクワガタ、カヤコオロギ、キリギリスなどが確認されている。津久井町の場合住宅密集地域といっても畑や荒地、果樹園などが混在し、また庭木や垣根なども多くあるため、全くの住宅密集地といえる場所はないのかもしれない。しかし、クロゴキブリやクロオオアリ、ヤマトシジミ、ツツジグンバイなど家や庭、歩道沿いなどで確認できる昆虫類も数多く存在する。

３　津久井町史自然編昆虫類基礎調査の成果

今回の報告では、過去の文献からの引用も含め 25 目 5,125 種の昆虫類を記録することができた。この報告書は平成 24 年度に刊行を予定している津久井町史自然編執筆のための昆虫類基礎調査の成果であると同時に、津久井町の昆虫目録である。神奈川県の昆虫相については、2004（平成 16）年に神奈川昆虫談話会による『神奈川県昆虫誌Ⅰ～Ⅳ』が発行されている。この昆虫誌では昆虫類 31 目に渡り約 10,900 種が報告され、県レベルでは全国一の種数を報告したことになる。市町村ごとに昆虫相を明らかにしている地域は多くないが、市町村史や博物館での調査成果、環境基本計画の策定などによりその数字を見ることができる。愛川町では博物館建設準備の基礎調査として動植物調査が行われ 1,793 種（1999 年時点）の昆虫類が報告されている。市町村史刊行に伴う基礎調査により確認され報告されているものでは、大和市が 1,413 種（1991 年時点）、座間市が 1,393 種（1993

表１　出現種数の比較

分類群（目）	神奈川県＊1	旧相模原市＊2	津久井町
カマアシムシ	23	―	8
コムシ	4	―	―
トビムシ	70	―	18
イシノミ	4	1	3
シミ	1	―	2
カゲロウ	72	34	65
トンボ	85	55	52
カワゲラ	58	16	48
ガロアムシ	1	1	1
バッタ	120	73	77
ナナフシ	6	3	4
ハサミムシ	12	6	5
カマキリ	7	5	3
ゴキブリ	8	4	4
シロアリ	3	2	1
チャタテムシ	23	2	5
ハジラミ	5	―	―
シラミ	3	―	―
カメムシ	1,237	242	328
アザミウマ	97	―	4
ヘビトンボ	5	4	4
ラクダムシ	2	1	―
アミメカゲロウ	70	32	38
コウチュウ	4,127	1,295	2,600
ネジレバネ	4	1	―
シリアゲムシ	13	2	9
ノミ	8	1	―
ハエ	907	291	262
チョウ	2,392	883	1,147
トビケラ	138	33	100
ハチ	1,407	323	337
計	10,912	3,310	5,125

＊1　神奈川県昆虫誌(2004)より　　＊2　相模原市史調査報告書２動植物調査目録(2009)より

年時点)、旧相模原市が 3,310 種（2009 年時点）となっている。また行政区域ではなく独自の地域として調査報告されているところでは、横浜市の円海山で 3,552 種（2000 年時点)、丹沢大山学術総合調査では 1997（平成 9）年の報告で 5,534 種、2007（平成 19）年は 7,527 種と、昆虫相の解明度として神奈川県は非常に優れていることが分かる。表 1 に目別の確認種数を神奈川県及び旧相模原市と比較して掲載した。

旧相模原市での 3,310 種という数字も、相模原台地上での記録としてはかなり精度の高い調査であったと思われるが、やはり丹沢山地という大規模な緑地とその背後に広がる低山地、里山、水域の多様性など、環境の多様化により旧相模原市に比べ津久井地区の種数は圧倒的に増えている。両地域に共通して生息あるいは記録されている昆虫もいるであろうが、環境の違いによりいずれかの地域限定種もかなり確認できるため､現相模原市域の昆虫相が幅広いものであることは間違いない。

4　おわりに

調査期間は長かったものの、決して十分といえる調査ではなかった。限られた調査員の配置は、専門分野に偏りができ、既存の文献に頼るしかなかった。また津久井という地が調査員からしてみれば遠隔の地であり、足を運ぶこともままならなかったことも否定できない。今後はこれを基礎として相模原市の昆虫相を解明していき、相模原市昆虫誌ができることを願うだけである。

最後になってしまったが、今まで調査や同定など支えていただき、御指導、御協力をいただいた方々のお名前を記して感謝の意を表したい。

（＊1 相模原市立博物館　＊2・3・4　津久井町史自然部会調査員　＊2・3　神奈川昆虫談話会
＊4 玉川大学大学院農学研究科）

青木雄司　秋本和弘　秋山幸也　朝比奈ゆか里　石塚新　石綿進一　岩田恵子　内田英樹
岡島秀治　岡林良一　小野澤康　(故)鹿島敏夫　加藤房郎　片山修　川崎香代　小林貞
後藤裕子　篠崎圭子　篠崎正博　嶋﨑えつ子　柴田泰利　神保宇嗣　高城律子　舘野鴻
露木繁雄　永井充　長瀬博彦　中町華都雄　野口浩史　野崎隆夫　高橋和弘　原弘　平野幸彦
藤井隆　藤田裕　守屋聡子　守屋武二　安川源通　(故)脇一郎　渡辺恭平　和田京子
（敬称略・50 音順）

環境省生物多様性センター　国土交通省相模川水系広域ダム管理事務所
神奈川県自然環境保全センター　神奈川県立津久井湖城山公園パークセンター
青根財産区管理会　青野原財産区管理会
鳥屋財産区管理会　牧野財産区管理会
鳥屋造林組合　青ヶ岳山荘
アマノ株式会社津久井事業所　ニックス株式会社
相模原市植物誌調査会　さがみはら水生動物調査会　（順不同）